

令和 2 年 7 月 6 日現在

機関番号：16301  
 研究種目：基盤研究(C)（一般）  
 研究期間：2017～2019  
 課題番号：17K02173  
 研究課題名（和文）ニヒリズムの現実態としてのテクノロジー時代における「労働」と「活動」の再検討

研究課題名（英文）Reconsideration of "Labor" and "Action" in the Technological Age as a Realization of Nihilism

研究代表者  
 山本 與志隆（Yamamoto, Yoshitaka）  
 愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号：50294781  
 交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はハイデガーとユンガーの思惟に示された現代の労働を巡る諸問題に対して、アーレントの活動（action）についての思惟を対照させて、どのようにしてテクノロジーの支配の下で労働を再生するかという可能性について究明することを目指して企図された。またこのことを通して、現代のニヒリズムの危機の転換への指針とすることを目的とした。そのために、三者の「労働」を巡る思惟の再検討とともに、特にアーレントが労働（あるいは仕事）に対するあり方として提示した活動の概念が現代社会の我々に対して有する意義を究明した。そして最終的に、それぞれの思惟を現代を生きる我々の生において、実質的なものとすることを目指した。

#### 研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で、『存在と時間』以降のハイデガーの思惟と、その影響関係にあったユンガーやアーレントの思惟をより明確に解釈することが可能となった。ここから、それぞれの思惟を、現代社会における我々の危機の克服のための道標として新たに捉え直すことが期待できる。

そして本研究成果は、共同体や地域のネットワークが崩壊し、「無縁社会」とも言われる現代の日本社会の喫緊の課題とされる労働を通じたネットワーク化に理論的基礎づけとその充実化のための素地を与えるものとなるであろう。また、「活動」の探究は、近年活発化した学生の政治的行動のあり方についても、それを一過性のものとしなないための理論的基盤に反省を促すであろう。

研究成果の概要（英文）： This study contrasts the Arendt's thoughts of "action" with the problems of modern labor presented in Heidegger's and Juenger's thoughts, and tries to show how to work under the domination of modern technology. It was designed with the aim of investigating the possibility to reactivate our works in this situation. With this investigation, it has also aimed to serve as a guide for the transformation of the contemporary crisis of Nihilism. To carry out this purpose, along with a re-examination of the thoughts concerning the "labor" of the three thinkers, I have particularly clarified the significance of the concept of action that Arendt has presented as an alternative to labor (or work) in modern society. Finally, I have aimed to give each thought reality in our modern lives.

研究分野：現代哲学

キーワード：M. ハイデガー E. ユンガー H. アーレント 労働 活動 テクノロジー 総かり立て体制 ニヒリズム

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、ハイデガーとユンガーの思惟に示された現代の労働を巡る諸問題に対して、アーレントの活動(action)についての思惟を対照させて、テクノロジーの支配の下でどのようにして労働を再生するかという可能性を究明することを目指して企図された。このことを通して、現代のニヒリズムの危機の転換への指針とすることが本研究の目的である。そのために、三者の「労働」を巡る思惟の再検討ともに、特にアーレントが労働(および仕事)に対するあり方として提示した活動の概念が現代社会の我々に対して有する意義を究明する。そして最終的に、それぞれの思惟を現代の世界を生きる我々の生において、実質的なものとする事を目指した。

本研究の学術的背景となる事柄としては、2014年、2015年にP. トラヴニーの編集によってハイデガー全集第94~97巻(所謂『黒ノート』)が出版されたことがある。これによって、ハイデガーの「反ユダヤ主義」的言説を巡って、日本も含め、世界中で大きな議論が巻き起こった。折しも2015年に3ヶ月間、トラヴニー教授の許で、2015年度までの研究課題「現代の危機の転換へ向けた『労働』を巡るハイデガーの思惟の究明」を遂行した私は、『黒ノート』執筆当時の政治状況やテクノロジーへのハイデガーの批判と、その連関での「労働」についての思惟の原型が『黒ノート』の内にも存することを見出した。この研究を通して、労働が「総動員」という時代状況の中で、人間存在を「無化する(vernichten)」ことを本質とする現象であることが明らかとなり、現代という時代の危機が、西洋の形而上学をその根源において規定する、ニヒリズムの帰結であるという歴史的な位置づけが可能となった。

また、近代の人間類型を「労働者」として把握するユンガーの思惟が、ハイデガーの技術論に重要な示唆を与えたことも明らかとなった。この視点に立って、近代のテクノロジーが導く危機を克服する道を、西洋の伝統的な形而上学とは「別なる始まり」に求めたハイデガーの思惟は、また一方でナチの全体主義に取り込まれかねない危険を孕んだものでもあった。

そこで、本研究においては、こうしたハイデガー、ユンガーの思惟を照らし出す鏡として、ハンナ・アーレントの思惟を手引きとし、ハイデガー、ユンガーによっても否定的に捉えられた人間存在の「労働(labor)」と、それとは異なる「活動(action)」のあり方を究明することを目指した。そしてここから、改めて公共的、政治的領域を形成し直すと同時に、テクノロジーの支配によるニヒリズムの中にあっても、労働の本来の意義を見定める視点の涵養を図ることで、現代の危機を実質的に克服する道を探求しようとしている。

## 2. 研究の目的

上記の目的のための、本研究の到達点は次のように要約できる。

- (1)テクノロジーをその本質とする現代のニヒリズムの状況下での、人間存在の存在様態としての「労働」のあり方を、ハイデガー、ユンガー、アーレントに即して捉え直す。
- (2)労働、仕事との連関の中で、「活動」の根本性格を再検討し、ハイデガーのニヒリズムの克服の思惟、アーレントの複数性の思惟を、公共的世界の存立の可能性の中で究明する。
- (3)ハイデガー、ユンガー、アーレントによって思惟されてきた全体主義、ナショナリズム、反ユダヤ主義のあり方から、そのニヒリズムに根ざした由来を究明し、求められる本来の人間存在の労働のあり方を逆照射するとともに、政治的、公共的な領域に確固たる存立を与える。

第一の目標は、そもそも現代という状況の中での「労働」の意義を改めて性格づけ、その評価を問うことである。その際に、われわれに重要な示唆を与えるのが、『人間の条件』において「仕事(work)」および「活動」との連関の中で、労働を位置づけたアーレントの思惟である。アーレントはマルクスを踏まえながら、20世紀における労働の問題を徹底して考えた。そこから我々は、ハイデガーあるいはユンガーの思惟に接続する重要な接点と乖離点を見出すことができる。そこでは、労働はまず「仕事」と対照され、持続的、耐久的に存在する作品(work)を制作する仕事に対して、その都度の生物学的な生を支える消費財の制作に関わる人間の行為と規定される。この点で、労働は現代における大量生産、大量消費社会のあり方を導くものであること、そして、あらゆる営みが労働化されると、他の諸生物とは異なるはずの人間存在が、持続的な作品として文化、文明を形成しつつ世界に住まうあり方を喪失してしまうということが示唆されている。こうしたアーレントの労働概念を、ハイデガー、ユンガーの捉えた労働のあり方も視野に入れつつ究明することが必要である。

次に、アーレントの「活動」の議論における「複数性(plurality)」という概念に照らしてハイデガーのニヒリズムの克服の可能性を問うことが第二の目標である。唯一無二の存在として生まれる人間存在は、その「出生性(natality)」に基づいて、自らのアイデンティティを保持しつつ他者との相互関係に入る、複数性によって規定される。言語によるコミュニケーション行為を介した議論によって人間存在相互の関係を開く活動は、この複数性によって初めて公共的、政治的な領域を形成するとされる。この出生性という「始まり」のあり方を我々の公共的世界の存立の契機として導入する活動は、ニヒリズムの克服を「別なる始まり」に求めたハイデガーの存在歴史的な思惟を、我々の世界のうちに引き戻すという意義を担いいると考えられる。

さらに、アーレントが『全体主義の起原』においてなした、西洋の歴史のうちに胎動する全体主義の問題を考察することが第三の目標となる。この点において、ナチの民族主義的な立場を否

定しつつも「ナショナリスト」であり続けたユンガーや、ドイツ民族こそが西洋の存在の歴史の「別なる始まり」を打ち建てるものであるとしたハイデガーの思惟と切り結ぶ接点を見出すことができる。そこで、ハイデガーの『黒ノート』に見られる「反ユダヤ主義」の問題に対して重要な解釈視点を提供するためにも、反ユダヤ主義、全体主義に関するアーレントの思惟と、ハイデガーの思惟を併せて検討することが肝要である。

以上のように、本研究において注目するのは、近代以降のテクノロジーを批判し、「別なる始まり」を唱導するハイデガーの思惟、さらにその中でハイデガーが取り上げたユンガーの「労働」についての思惟であり、それらとアーレントの「労働」、「仕事」と「活動」を巡る思惟の連関である。このようにテクノロジーと労働を基軸として思惟するのは、現代の日本にあっても「貧困」あるいは「被災」をキーワードとする多様な危機の中に、幾重にも重ねられたテクノロジーの支配と、労働、仕事概念の変容、変質が見届けられると同時に、それらを超える公共的領域の確保が喫緊の課題となっているからである。

本研究全体の目的達成のために、日本の「ハイデガー・フォーラム」の研究者との学術的交流を図るとともに、ハイデガー、及びアーレントにも造詣の深い壽卓三愛媛大学教授との研究会を通して連携を深めていった。その中で、ハイデガーが西洋の伝統的な形而上学、ニヒリズムに見出していた問題を見極め、それらを継承しその度を深めていくように見える現代の我々の危機の状況を克服するために、「別なる始まり」の思惟と「活動」を通じた公共的思惟のなし得ることの可能性の究明を目指した。

本研究の所期の有意義性としては以下のような点が考えられる。従来においてもハイデガー、ユンガーのそれぞれについての研究は、多岐に亘ってなされてきたし、また、アーレントについての研究も主に政治哲学の観点から精力的に進められてきた。しかし、それら三者の影響関係を上に述べたような仕方では、「労働」そして「活動」を軸にして一定の連関の下に捉えようとする研究は多くはなく、この点で本研究は独創性を主張できる。とりわけ、ユンガーとアーレントを連関させる試みは、ほとんどなかったと言ってよい。

さらに、本研究の成果によって『存在と時間』以降のハイデガーの思惟、およびその影響下にあったユンガーやアーレントの思惟をより明確に解釈できると考えられる。これは、従来の解釈を追認するに留まらず、それぞれの思惟を、現代社会における我々の危機を克服することへの実質的な道標として新たに捉え直すこととして期待できる。

そして、この研究の成果は、共同体や地域社会のネットワークが崩壊し、「無縁社会」と言われるようになった現代の日本社会において喫緊の課題となっている労働を通じたネットワーク化に理論的基礎づけを与え、それを充実させるための素地を形成するものとなるであろう。また、「活動」の探究は近年活発化した学生による政治的行動のあり方に対しても、それを一過性のものとしてしまわないための理論的基盤に対する反省を促すものとなるであろう。

### 3. 研究の方法

上記の目的のために、以下の3つの課題を設定する。

(1)ハイデガーが伝統的な西洋の形而上学の根源にあるニヒリズムを批判する際の論点を確定する。そのためには、公刊中のハイデガー全集、とりわけ『黒ノート』等の基礎資料を初め、二次文献の綿密な分析、解釈を遂行する。それと同時に、ドイツの現象学、ハイデガーの哲学の研究拠点であるヴッパータール大学、フライブルク大学の研究者と連携することや、メスキルヒのハイデガー・アルヒーフで資料調査することが研究遂行のために極めて重要な意義を有する。特に、ハイデガー全集の編集を担当する P. トラヴニー教授とハイデガーの思惟の展開について、国際学会やシンポジウムに積極的に参加することで、意見を交換する機会をもつことが有益且つ必要である。

(2)上述のハイデガー、あるいはユンガーの思惟が人間存在と、その活動としての「労働」の位置づけを検討し、ニヒリズムの時代の労働に関するハイデガーの批判の核心を究明する必要がある。そのために、ハイデガーの「労働」についての思惟の参照軸として、上述のユンガーの『労働者』、『大理石の断崖の上で』、『総動員』、『線を越えて』等や、さらにアーレントの『全体主義の起原』、『人間の条件』、『精神の生活』に著された思惟を併せて検討する必要がある。その際、「ニヒリズム」をどのように解釈するかが鍵となることから、当然ニーチェの思惟を十分に視野に入れる必要がある。このようにして、ハイデガーの思惟と、ユンガー、アーレント、あるいはニーチェの思惟の連関を明らかにすることは本研究において重要な課題である。

(3)形而上学の根源にあるニヒリズムの自然や人間存在に対する布置を把握することから、とりわけ 2011 年の東日本大震災以後の、迷走する人間と世界、あるいは自然との関わり、さらにその中で技術と「労働」のあり方について、環境倫理や生命倫理に関わる問題をも含めた、現代の社会的な危機に対して、ハイデガーの言う「別なる始まり」の思惟が果たしうる役割を考究するとともに、アーレントの言う「活動」がどのようにして公共的な活動を基礎づけ、新たな公共性を涵養しうるかを見極めることが最終的な課題となる。

#### 4. 研究成果

以上のような目的と有意義性を視野に収めつつ、本研究はまずは三者の基本的な思惟の内実と連関を明確にすることを目指して遂行された。以下、その過程で執筆、発表された論考の主題を簡単に述べておきたい。

論文「諸学問の危機と現象学 フッサールとハイデガーの思惟を手引きとして」(『愛媛大学法文学部論集人文学編』第48号、2020年)は、1930年代からハイデガーが見出した西洋の形而上学への内在的批判の視点を確認するために、その師 E. フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象』を参照しつつ、現象学の立場から、当時の「諸学問(諸科学)の危機」のあり方について論じた。

論文「テクノロジー時代のニヒリズム ニーチェとハイデガーの思惟を手がかりにして」(『愛媛大学法文学部論集人文学編』第44号、2018年)では、そうした時代状況の下で、技術に基づくテクノロジーのあり方が、ハイデガーが言う西洋形而上学の帰結としてのニヒリズムの内にあることを明らかにした。

論文「技術と真理 ハイデガーのテクノロジー批判」(『愛媛大学法文学部論集人文学編』第46号、2019年)づけ、「真理」との連関において否定的に見出し、技術のもたらす「危険」からの救いを「芸術」に求めることを、その技術批判から読み解いた。

また、「ハイデガーの技術論における人間存在 E. ユンガースの思想との交錯」(『倫理学研究』第49号、関西倫理学会、2019年)ではハイデガーの技術論の内における人間存在のあり方を、ユンガースの思想との連関の内に捉え直した。

さらに、翻訳・解題として、ハイデガー全集第90巻に収められたハイデガーの「エルンスト・ユンガーへ」という覚え書きを翻訳し、それへの解題を付した(『現代思想』2018年2月臨時増刊号、青土社、2018年)。ここから両者の思惟の近さと遠さが浮き彫りになった。

最後に、本研究課題成果報告書では、論文「現歴史のニヒリズム 解釈学と歴史の物語り論」(『愛媛大学法文学部論集人文学編』第42号、2017年)を掲げ、現代におけるニヒリズムのあり方を「歴史の物語り論」の観点から照らし出し、ニヒリズム理解の一端とした。そして、成果報告書の「結びに代えて」では、十分に考究するに及ばなかったハイデガー、ユンガーと、アーレントの接点をユヴァル・ノア・ハラリの『21 Lessons』を手引きとしつつ、今後の課題として提示した。

以上の各論考の内容が、本研究が研究期間内に到達した範囲である。上述したような、当初掲げられた目標には及ばなかった点も見られはするものの、今後の思惟の課題を明確にするところまでは達し得たと思われる。これらを通して、我々が直面している現代の危機を克服するために、労働の意義を基礎づける新たな思惟の指針を見出したい。また、形而上学の根源にあるニヒリズムの、自然や人間存在に対する布置を把握することから、とりわけ2011年の東日本大震災以後の、迷走する人間と世界、あるいは自然との関わり、さらにその中で技術と「労働」のあり方について、環境倫理や生命倫理に関わる問題をも含めた、現代の社会的な危機に対して、ハイデガーの言う「別なる始まり」の思惟が果たしうる役割を考究するとともに、アーレントの言う公共的な活動が、どのようにして新たな公共性を涵養しうるかを見極めていきたいと思量するところである。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 山本與志隆	4. 巻 48
2. 論文標題 諸学紺の危機と現象学 フッサールとハイデガーの思惟を手引きとして	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 愛媛大学法文学部論集人文学編	6. 最初と最後の頁 43, 60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山本與志隆	4. 巻 49
2. 論文標題 ハイデガーの技術論における人間存在 E. ユンガーの思想との交錯	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 倫理学研究	6. 最初と最後の頁 88, 104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） <a href="https://doi.org/10.24593/rinrigakukenkkyu.49.0_88">https://doi.org/10.24593/rinrigakukenkkyu.49.0_88</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山本與志隆	4. 巻 46
2. 論文標題 技術と真理 ハイデガーの技術批判	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 愛媛大学法文学部論集人文学編	6. 最初と最後の頁 1頁-16頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山本與志隆	4. 巻 44
2. 論文標題 テクノロジー時代のニヒリズム ニーチェとハイデガーの思惟を手がかりにして	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 愛媛大学法文学部論集人文学編	6. 最初と最後の頁 85, 103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山本與志隆	4. 巻 42
2. 論文標題 歴史の二ヒリズム 解釈学と歴史の物語り論	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 愛媛大学法文学部論集人文学編	6. 最初と最後の頁 17, 31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 今井敦、桐原隆弘、中島邦雄、山本與志隆
2. 発表標題 フリードリヒ・ゲオルク・ユンガーの技術論 『技術の完成』を中心に
3. 学会等名 社会思想史学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本與志隆
2. 発表標題 ハイデガーの技術論における人間存在 E. ユンガーの思想との交錯
3. 学会等名 関西倫理学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 轟孝夫・森一郎他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 青土社	5. 総ページ数 326
3. 書名 現代思想 2018年2月臨時増刊号 総特集=ハイデガー 黒ノート・存在と時間・技術への問い	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----